社会とのつながりのなかで学ぶ、ということ

――田中萬年著「生きること、働くこと、学ぶこと」を読んで

里見　実

「教育する」という言葉

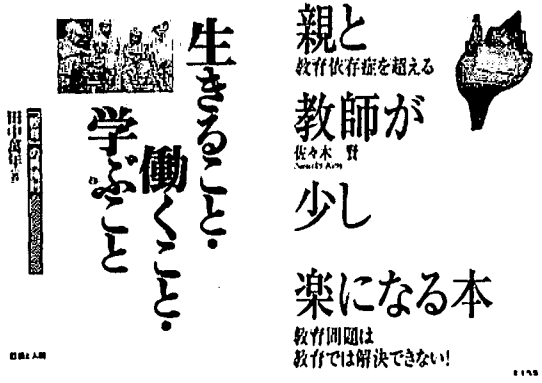
中等学校の教員養成制度が変わって、三年前から、「教職論」という科目を担当することになった。教職課程を履修するにあたってのガイダンスの意味合いをもった科目である。

その授業の一貫として、毎年、各自の学校体験、もしくは学校以外の場での「学び」の体験をレポートし、そこから浮かび上がってくる問題をグループで討論する、ということを行なっている。受講者の多くは一年生だ。私としては、直截に教師のありかたを論じたりするよりも、昨日まで「生徒」であったかれ・彼女たちが、自らの学校体験を意識的に「振り返り」、同時にまた、それを相対化する機会として、この時間を活かしてもらえたらよい、と考えている。

二〇〇人近いマンモス授業なので、学生の体験も多様である。他の学生たちの経験に触れることで、学生たちは、一括りにはできない、日本の学校の多様な表情に気づくことになる。そこから日本の教師たちの多岐多様な佇まいも見えてくるのだ。

今年、学生たちのレポートを読んでいて、一つ、気

になることがあった。「教育」「教育する」という言葉が、頻繁に出てくることだ。一つには、この講座が「教職論」であることとも関係しているだろう。「教育」という言葉は、ある関係性を表示する言葉として使われている。「教師は生徒を教育する存在であり、かれらにナメられないように、すべからく威厳をもたねばならない」といった文脈で、しばしば「教育」という言葉が飛び出してくるのである。



技術と人間　1400円＋税　　北斗出版　1800円＋税

教師になることは、すなわち「教育する」人になることだと、学生たちの多くは考えているようだ。昨日まで「生徒」であったかれ・彼女たちは、ゆくゆくは教員の免状を取得して、今度は生徒たちを「教育する」立場に立つわけである。教職を志望する学生たちにとって、教育する、ということが、「学校関係を再生産する」ことと同義のものとしてあるとすれば、そこでいう「教育」を再審に付することがどうしても必要だろう。

「教育する」などというセリフがすらすらと若者の口をついて出るのは、つねに「教育され」つづけてきた過去の経験と無関係ではないだろう。どこかで参加型の学びを経験した学生は、(「教える」という言葉を使うことはあっても、)「教育する」などという言葉は、あまり使わない。

二つの反「教育」論

佐々木賢『親と教師が少し楽になる本』(北斗出版)、田中萬年『生きること・働くこと・学ぶこと』(技術と人間)など、「教育」の存在自体を近代の病理現象として疑問視する著作が、最近、いくつか続けて刊行された。佐々木氏や田中氏によれば、「教育」という言葉が日本で一般的に使われるようになったのは、明治中期以降、国が定めた一定の「教育内容」を、すべ

ての生徒に一律に注入する近代学校システムが確立してからのことのようだ。そうした制度に見合う概念として、「教育」という言葉が登場するのである。江戸時代の寺子屋でも、徒弟制度下の技術の伝授の中でも、「教育」は行なわれていない。親の子にたいする愛育や撫育はあったが、教育などという「打算的な目的の他動詞」(佐々木)は、少なくとも庶民の間では使われていない。「教育」はeducationの訳語として普及した、とされている。だがeducationという英語と、その訳語とされる「教育」との間には、実は大きな相違があると、田中氏は指摘する。

education には仕事のための能力の開発という意味がつよく含まれており、職業と結びついた技術・技能の訓練が、その重要な側面となっている。これと対照的に日本語の「教育」からは、そうした内包がほとんど欠落している、というのである。教育の主流は圧倒的に「普通」教育であり、その普通教育の内実は働くこととは無関係な「教養」的な諸知識をあたまに詰め込んで、より高い学歴を獲得することにほかならなかった。そうした「教育を受ける」ことが「権利」として美化されていく反面、つまるところは学歴競争にすぎない「教育」の普及とメインストリーム化は、低い学歴でもつける職業に従事している人々、腕一本で働く人々の「誇りを奪う」ものにもなった。そうした「教育」mis-educationへの怒りをこめて、田中氏は働くこと、生きることとより直截に切り結んだもう一つのeducation(著者はキョウイクと表記している)の必要をうったえている。

「教育」の呪縛がもたらす病いの一つは、「社会とつながっている」という実感を持ちにくいことだ。学校という非常に特殊な空間が唯一の「社会」になってしまって、その空間の内部で自閉的に自分というものが定義されていく。極端なはなし、学校の勉強がデキたり、デキナカッたりする自分が、「自分のすべて」なのだ。仕事を通して社会につながること、そのつながりの中で自分の存在を感ずることができないのだ。これはまさに病いだろう。

職業訓練や職業教育をもっと大きく教育の中に位置づけるべきだ、と、田中氏は考えているようだ。真意がもう一つ、はっきりしないので、とりあえず「ようだ」としておく。それらを位置づけようとすると、教育と呼ばれてきたものを根本的に問いなおし、それを

再定義することが必要になるわけで、だからこその「教育」概念の再検討なのだろう。佐々木賢氏の場合は、もっと教育にたいして懐疑的だ。佐々木氏は、職業教育を、教育に含めるべきだ、とは決していわない。「教育の立場から職業訓練を見直す」などともいわない。教育と呼ぼうと、education と呼ぼうと同じことで、教育の範疇にくりこまれたら最後、職業訓練は必然的に「生きること」「働くこと」「学ぶこと」から分離していく、と考えている。

また佐々木氏は、教育の欠点が、教育そのものに由来しているとは、考えない。どこの国でも、学校はさまざまな病症に悩まされており、職業教育機関とても、その例外ではない。この病いは教育の病いというよりも、社会システムそのものに深く根ざした病いであって、「教育改革」によって教育を改革することはできないのだ。どのような教育であれ、教育が、「価値の制度化」（イリイッチ）をめざす営みであることにかわりはない。「価値の制度化」がもたらすのは、お墨付きをえた諸価値への依存化と無能化である。いかなるものであれ、お手盛りのプラスイメージを投影して、教育を語ってはならない。「教育現象を理解するためには、一切の価値語を排して教育を定義する方がいい」と、佐々木氏はいう。

両氏は同じことを言っているのだろうか。そうは思えない。講壇教育学者たちの言説を厳しく批判するときの田中氏は、ある価値の実現を、すなわち、働くこと、生きること、学ぶことの統合を教育（キョウイク）に期待するスタンスに立っている、と言えるだろう。そのかぎりにおいてキョウイクへの信頼は失われていない、と見てよいだろう。この信頼こそが問われねばならない、と、おそらく佐々木氏ならばいうだろう。

子どもや青年の出番がない？

佐々木氏や田中氏の問題提起を重要と考えながらも、その「教育」の中で何ができるかを考えたい、というのが、私のスタンスだ。まさにそれゆえにこそ、教育の可能性と陥穽の双方にたいして、私たちは自覚的でなければならないだろう。

人間は、遺伝子によって自らの形質を次代に伝えるだけでなく、文化を形成し、かつそれを次代に伝えることで、人間としての固有の存在様式を形づくってきた。この文化の伝承を教育と呼ぶとすれば、教育は、人間が人間となるための不可欠の条件であるといわなければならないだろう。

だが教育は、人間の人間化をもたらすと同時に、人間を非・人間化する可能性をも秘めている。文化が硬直化し、所与の文化への適応が一方的に強調・強化されることになれば、教育は、既成の社会システムと文化の再生産の装置になっていく。文化と社会を、そして自らを創造する主体としての人間の自由は空無化され、オートマティクな自己複製の論理と所与の決定に服する受動性が、それにとって代わることになる。今日、「教育」は、まさにそのための装置として現存しているのである。

その中で何ができるかを思量するときに、当然のことながら、「教育」に内在する矛盾に着目することが必要になるだろう。

教育は、「教える」行為と「学ぶ」行為の複合体として存在する。私たちがいま目にしている「教育」は、「学ぶ」行為を従属化しながら、「教える」行為をかぎりなく肥大化していく、そうした近代の「教育」である。

たくさんの学生たちのレポートは、「教育される」客体として、学校という空間に身を置いてきたかれ・彼女たちの姿を伝えている。学習は、課せられた行為、試験と評価にたいする適応行動であって、自らの内発性に裏付けられた「学び」ではない。学習がそうである以上、実は「教え」も十全には機能していないので

なくて、職業のありよう自体が没意味化していて、それが「教育」に投射されている、と見る方が正しいのではないか。

いうまでもないことだが、フリーターが増えるのは、学校教育のためではない。職業そのものが急速に浮薄化しているのだ。職業教育の振興によって、それが打開されるわけではない。普通教育か、職業教育かが、問題なのでもない。職業教育が正しく位置づけされていない、という著者の「教育」批判には私も同感だが、そこが問題の要ではないはずだ。教育が病んでいるのは事実だが、それは教育の領域のバランスの補正などで解決されるようなものではない。

「教育」の根本的な見直しこそがいま求められている

私自身は教職課程の専担であり、さして自覚的にではないのだが、それなりに、一種の「職業教育」に従事している、といってよい。

歴史や広い意味での文学を、教師としての仕事に結びつけて学ぶ、ということが、学びの流儀としてかなり生産的なものであることを、私は確信している。他人に伝える、ということをたえず念頭において知識を学ぶことは、社会とつながりながら学問をする一つの方法であって、「教える」という実地の行為にそなえて、教職を志望する学生たちはたえず自分の知識や理解の質を問いただされることになるわけだ。自分の学習を自分一個の学習にとどめない、という学びの理念を、私は教員養成の仕事のなかで見つけたのだと思う。「職業」を意識することは、学びを真正化する重要な要素なのだ。

そういう自分の感触と重ね合わせて、私は田中氏の職業教育重視論を共感的に受けとめているつもりだが、しかし私は、私の仕事が「職業教育」なのか、「教養」か、はたまた専門か、という区分にはまったく興味がない。それは「教育」業者の縄張りの問題にすぎないだろう。

子どもを「教育する」などという「使命感」をもった教師という名の職業人を、私は「養成」したいとは思わない。教師という職業に特化した教養のありかたも、健全なものだとは思わない。自分の仕事を「職業教育」として位置づけることを、おそらく、私はどこかで拒絶しているのだろう。

「普通」教育や「教養」と呼ばれているものが、ずいぶん奇体なものとして存在していることは事実であるが、普通教育が、つねに労働や職業選択に無関心であるとはかぎらない。私の知見の範囲にかぎっても、「ものづくり」や農作業体験は、先進的な社会科実践の中で大きな位置をしめるようになっている。一方、職業教育もまた、技能主義からの脱皮を求められている。職業教育が、すぐに職業にリンクする時代は、すでに去っている。「市民」としてどう生きるか、ということと、「職業人」としてどう生きるかということを、相互に媒介させて考えることが、これからの若者の切実な課題になる。普通教育と職業教育を、二項対立的にとらえていてはならないのだ。

重要なことは、自分が主役となって何かを学ぶ、そうした学びのスタイルを育てることだろう。分野はあまり問題ではない。そうした視点からの「教育」の根本的な見直しが求められている、という認識を、私は田中氏と共有し、またともに強く訴えたい。

（さとみ　みのる、大学教員）